

「音調単位」と「文節」—西南部九州二型アクセントからの提言—

木部暢子（人間文化研究機構）

1 語アクセントの実現の領域（ドメイン）に関するこれまでの考え方

日本語のアクセント研究は、これまで「文節」をドメインとして行われてきた。有坂秀世は「アクセント型の本質について」（1941）の中で次のように述べている。

アクセントの上から言へば、「単語」は独立性を持つものではない。例へば、サキマシタのアクセントは、サキマシタといふ一つの文節全體をとつて考へる時に、始めてその形（下上上下型）をなすものである。（有坂 1941: 84-85）

もつとも、各単語も亦アクセントの上にそれぞれの個性を持つて居り、その個性に従つてやはり幾つかの型に分類することは出来る。併しながら、文節アクセントの型が顯在的な形の上の分類であるのに對し、単語アクセントの型は、潜在的な機能（文節構成上の機能）の上の分類に過ぎない。（同:85）

「潜在的な機能」と「顯在的な形」の関係について、このあとに次のような例が上がっている。これを見ると、この2つは現在でいう「基底形」と「表層形」に対応するようである。

- | | | |
|----|---|---|
| 体言 | { | a. ウシ（牛）オカ（岡）… m型, n型と結合して下上上型の文節を作る機能を有する |
| | | b. ウマ（馬）ヤマ（山）… m型と結合する時は下上下型の文節を作り, n型と結合する時は下上上型の文節を作る機能を有する |
| | | c. ネコ（猫）ウミ（海）… m型, n型と結合して上下下型の文節を作る機能を有する |
| 助詞 | { | m. ガ・ニ・オ・ハ・モ… |
| | | n. ノ |

有坂（1941）以降、アクセント研究の多くは「文節」を観察や記述のドメインとして行われてきた。「文節」の定義自体に「これ以上に句切る事が出来ない一区切」という内容が含まれているので、アクセントの領域（以下「アクセント単位」と呼ぶ）と「文節」とは、もともとかなり重なる部分がある。したがって、「文節」をアクセント研究に援用することには、それなりの妥当性があったものと思われる。ただし、「文節」と「アクセント単位」が一致しない場合もある。このようなものに関しては、これまでも記述や考察が行われ、歴史的側面や機能的側面から説明が行われてきた（上野 1984, 2012）。本発表では、このような一致しない例を改めて取り上げ、音調研究と文法研究の接点について考えてみたい。

2 鹿児島市の二型アクセントを取り上げる理由

本発表でN型アクセントを取り上げるのは、N型アクセントでは、音調パターンがN個に限られていて、しかも音調の領域が変動することがほとんどないため、「アクセント単位」の認定が比較的容易に行えるからである。例えば、鹿児島市の二型アクセントは、後ろから2音節目がH（高）となるA型と、最終音節がHとなるB型の2種類のアクセント型で構成されている。このHは、語の固有のアクセント（A型かB型か）を示す弁別機能を果たすと同時に、「アクセント単位」がそこで終わるということを示す境界設定機能を果たしている（上野 1984:171）。(1) は鹿児島市方言の発話例だが、[ガ] [ア] [タ] のHは、それぞれの語がA型、B型のどちらであるかを示すと同時に、そこで「アクセント単位」が区切られるということを示している（[はピッチの上昇を、] はピッチの下降をあらわす。なお、鹿児島市方言の韻律単位は音節 [syllable] である）。

(1) ソラ[ガ [ア]コ ナッ[タ (空が明るくなった)

東京方言のような「下げ核」により語のアクセントが示される体系では、上昇が「アクセント単位」の始まりをあらわすことが知られているが、川上 (1947) が指摘しているように、この上昇は時と場合によって変動する¹。(2) の a. b. c. では「アクセント単位」(川上の「句」)の区切り方が異なっているが、この3つは発話意図によって交替する。

(2) 「庭に咲いた女郎花」

- a. ニワニサイタオミナエシ (全体を一句に発音されたもの)
- b. ニワニサイタオミナエシ (全体を二句に区切って発音されたもの)
- c. ニワニサイタオミナエシ (全体を三句に区切って発音されたもの)

それに対し、鹿児島市二型アクセントでは発話意図によって「アクセント単位」の境界が変動することなく、常に一定している²。例えば、上の(2)の内容の発話は、鹿児島市方言では一貫して(3)のように3つの「アクセント単位」で発話される。

(3) [ニ]ウェ セ[タ オミナ[エシ。(庭に咲いた女郎花)

このような特徴を持つ鹿児島市の二型アクセントを素材として、以下では音調の単位である「アクセント単位」と文法の単位である「文節」の一致と不一致を取り上げ、音韻研究と文法研究の連携を考えてみたい。

3 「アクセント単位」と「文節」が一致する例

まず「アクセント単位」と「文節」が一致する例を見ておく。

¹ 五十嵐 (2021) では「デフレージング」という語でこのような現象が説明されている。

² 発話意図は別の形、例えばポーズやプロミネンス等によってあらわされるが、ここでは触れない。

鹿児島市方言の名詞単独形のアクセントと「名詞+ガ（主格）」のアクセントを示したのが表1である。名詞単独の場合も「名詞+ガ（主格）」の場合も、A型の語は後ろから2音節目がH、B型の語は最終音節がHになっている。つまり、助詞「ガ」は固有のアクセントを持たず、前接する名詞とともにA型、B型のアクセント型を作っている。「名詞+ガ（主格）」のアクセント型は、前接する名詞の固有の型と同じ型に実現する。

多くの助詞もまた「ガ」と同じように固有のアクセントを持たず、「名詞+助詞(連続)」がA型、B型を担っている。「名詞+助詞(連続)」のアクセントは前接する名詞の型と同じ型に実現する(表2)。

動詞に続く助詞・助動詞も同じく、固有のアクセントを持たず、「動詞+助詞・助動詞(連続)」でアクセント型を担い、前接する動詞のアクセントと同じ型に実現する(表3)。

表1 鹿児島市方言の名詞のアクセント

A型 名詞単独形	ga (主格)接続形	B型 名詞単独形	ga (主格)接続形
[ha]a (葉)	[ha]=ga	[ha (齒)	ha=[ga
[a]me (飴)	a[me]=ga	a[me (雨)	ame=[ga
o[na]go (女)	ona[go]=ga	oto[ko (男)	otoko=[ga
kama[bo]ko (蒲鉾)	kamabo[ko]=ga	asaga[o (朝顔)	asagao=[ga
abara[bo]ne (肋骨)	abarabo[ne]=ga	nodoboto[ke (喉仏)	nodobotoke=[ga

表2 鹿児島市方言の「名詞+助詞(連続)」のアクセント

A型 [a]me (飴)		B型 a[me (雨)	
[a]me (与格)	[a]me=N (属格)	a[me (与格)	a[me=N (属格)
a[me]=mo (累加)	a[me]=wa (主題)	ame=[mo (累加)	ame=[wa (主題)
ame=[ka]ra (奪格)	ame=[baʔ ³]kai (限定)	ame=ka[ra (奪格)	ame=baʔ[kai (限定)
ame=ka[ra]=mo	ame=baʔ[kai]=wa	ame=kara=[mo	ame=baʔkai=[wa

³ 本発表では、標準語の促音に当たる音を /ʔ/ で表記している。鹿児島市方言の音節構造はCVCを基本とする。例えば、/kuʔ/ (口, 首, 釘, 来る), /suʔ/ (杉, 筋, 為る) はCVCの1音節語である。この /ʔ/ は助詞や助動詞の前では、助詞や助動詞の頭子音に同化して、[kugga] (口が), [kukkara] (口から), [kutto] (来ると), [kuddo] (来るよ) のように、[g], [k], [t], [d] となる。これらは /ʔ/ の異音と考えることができる。したがって、[pp, bb, tt, dd, kk, gg, ss] のような geminate は /ʔp, ʔb, ʔt, ʔd, ʔk, ʔg, ʔs/ と解釈し、別に促音 /Q/ を立てることをしない。

表3 鹿児島市方言の動詞のアクセント

A型 [a]ku? (開ける)		B型 si[mu? (閉める)	
非過去	過去	非過去	過去
[a]ku?	a[ke]-ta	si[mu?	sime-[ta
[a]ke-N (否定)	ake-N-[zya?]-ta	si[me-N (否定)	sime-N-zya?-[ta
ake-[sa]su? (使役)	ake-sa[se]-ta	sime-sa[su? (使役)	sime-sase-[ta
ake-[ra]ru? (受身)	ake-ra[re]-ta	sime-ra[ru? (受身)	sime-rare-[ta
a[ke]-mos (丁寧)	a[ke]-mos-i-ta	sime-[mos (丁寧)	sime-mos-i-ta
ake-[mo]h-aN (否定)	ake-moh-aN-[zya?]-ta	sime-mo[ha-N (否定)	sime-moh-aN-zya?[ta
aku-[re]ba (条件)		simu-re[ba (条件)	
[a]ke-e (命令)		si[me-e (命令)	

4 「アクセント単位」と「文節」が一致しない例

鹿児島市方言の助詞・助動詞の中には、名詞や動詞と一続きになって「アクセント単位」を作らないものがある。(4)のような助詞・助動詞で、これらは、アクセント的には独立した「アクセント単位」を形成する。「文節」の考え方では、これらは直前の名詞や動詞と一体となって1文節を作るので、「アクセント単位」と「文節」が一致しないということになる。

- (4) a. コピュラ「ジャ」「ゴワス」
 b. アスペクト形式「オッ(動作継続)・チョッ(結果継続)」
 c. 様態「ゴチャツ」
 d. 終助詞「ド・ガ(情報伝達), カ・ヤ・ナ・ケ(疑問・質問), ナ・ナー・ネ・ネー(訴えかけ)」

まず、コピュラのアクセントを見てみよう(表4)。

表4 鹿児島市方言のコピュラ「ジャ」「ゴワス」

	A型 [a]me (飴)	丁寧	B型 a[me (雨)	丁寧
コピュラ	[a]me zya	[a]me gowas	a[me] zya	a[me] gowas
過去	[a]me zya?-[ta	[a]me gowas-i-[ta	a[me] zya?-[ta	a[me] gowas-i-[ta
否定	(a[me]=zya na[ka]	[a]me gowa[h-aN	(ame=[zya] na[ka]	a[me] gowa[h-aN
否定過去	(a[me]=zya naka?-[ta	[a]me gowah-aN-zya?-[ta	(ame=[zya] naka?-[ta]	a[me] gowah-aN-zya?-[ta

表4では、コピュラ「ジャ」「ゴワス」が続いても、[a]me (飴), a[me (雨)のHの位置が移動せず、[a]me (飴), a[me (雨)の「アクセント単位」がここで終了している。そのため、「ジャ」「ゴワス」で新しい「アクセント単位」の立ち上げが行われている。過去形で最終音節にHが

あらわれていることから、「ジャ」「ゴワス」はB型のアクセントを持つと認定することができる。これは「ジャ」「ゴワス」が「にてあり」「ごあります」に由来し、「あり」のB型のアクセントを受け継いでいるためである。

「ジャ」の否定 a[me]=zya na[ka (飴ではない), ame=[zya] na[ka (雨ではない) では、「ジャ」が独立していないが(網掛け部分)、これはこの「ジャ」がコンピュータの「ジャ」ではなく、「では」の縮約形であるためである。「では」は助詞連続なので、非独立タイプの表2のカテゴリーに分類される。

また、「ゴワス」の否定過去 gowah-aN-zya?-[ta の「ジャッタ」もアクセント的に独立していない。上と同じように考えるならば、これもコンピュータの「ジャ」と同じものではないと考えなければならない[表3にも否定過去の ake-N-[zya?]-ta (開けなかった), sime-N-zya?-[ta (閉めなかった), ake-moh-aN-[zya?]-ta (開けませんでした), sime-moh-aN-zya?[ta (閉めませんでした)の例を挙げている]。鹿児島方言の否定過去「ンジャッタ」の由来には、「ズアッタ>ザッタ>ンジャッタ」とする説(春日 1933, 大西 1999), 否定の連用中止形デ(ヂ)+アッタに由来する説(久保菌 2016)などがあり、いずれも「あり」に由来すると考えている⁴。もしそうだとすると、コンピュータの「ジャ」と同じようにアクセント的には独立タイプになると予想されるが、実際にはそうっていない。したがって、別の由来の可能性を考えるか、あるいは動詞否定過去表現で「ジャッタ」の文法化が急速に進んでアクセント的独立性が失われたと考えるか、さらに検討が必要である。

次に、アスペクト形式「オッ(動作継続)」「チョッ(結果継続)」のアクセントを見てみよう。表5にその例を挙げる。

表5 鹿児島市方言のアスペクト形式「オッ」「チョッ」

	A型		B型	
	[ki?] (着る)	[tu]ku? (漬ける)	[ku?] (来る)	tu[ku?] (付ける)
o? (動作継続)	[ki?] o?	[tu]ke o?	[ki] o?	tu[ke] o?
過去	[ki?] o?-ta	[tu]ke o?-ta	[ki] o?-ta	tu[ke] o?-ta
否定	[ki?] or-aN	[tu]ke or-aN	[ki] o-aN	tu[ke] or-aN
否定+デ	[ki?] o[r-aN]-de	[tu]ke o[r-aN]-de	[ki] o[r-aN]-de	tu[ke] o[r-aN]-de
tyo? (結果継続)	[ki?] tyo?	[tu]ke tyo?	[ki] tyo?	tu[ke] tyo?
過去	[ki?] tyo?-ta	[tu]ke tyo?-ta	[ki] tyo?-ta	tu[ke] tyo?-ta
否定	[ki?] tyor-aN	[tu]ke tyor-aN	[ki] tyor-aN	tu[ke] tyor-aN
否定+デ	[ki?] tyo[r-aN]-de	[tu]ke tyo[r-aN]-de	[ki] tyo[r-aN]-de	tu[ke] tyo[r-aN]-de

⁴ ロドリゲス『日本大文典』(1604-1608)に「Ximo (九州)」では「Aguezaru (上げざる), Aguezatta (上げざった), Aguezatte gozaru (上げざってござる)」が使われると書かれている(土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』p. 113)。1600年ごろには九州で「ザッタ」が使われていたらしいが、それ以外のことはわからない。

「オッ」「チョッ」が続いても [ki?] (着る), [tu]ku? (漬ける), [ku? (来る), tu[ku? (付ける) のHの位置が移動せず、ここで「アクセント単位」の境界が示され、「オッ」「チョッ」で新しい「アクセント単位」が立ち上っている。「オッ」「チョッ」は動詞に対して低く続き、Hが出現しないことが多いが、「否定+デ(～ないから)」ではA型のピッチパターンがあらわれる。これは「オッ」「チョッ」が「おる」「ておる」に由来するため、「おる」のA型を受け継いだものである。

次に、様態、希求をあらわす「ゴチャッ」を見てみよう。表6にその例を挙げる。

表6 鹿児島市方言の様態表現「ゴチャッ」

	A型	B型
名詞	a[meN]go tya? (飴のようだ)	ameN[go] tya? (雨のようだ)
	a[meN]go tya?-ta (飴のようだった)	ameN[go] tya?-ta (雨のようだった)
動詞	[na?]go tya? (泣くようだ)	ku[go] tya? (食うようだ)
	na[ko]go tya? (泣きたいくらいだ)	kuo[go] tya? (食いたいくらいだ)
	na[ko]go tya?-ta (泣きたいくらいだった)	kuo[go] tya?-ta (食いたいくらいだった)

「ゴチャッ」では、「名詞+ゴ」(a[meN]go(飴のよう), ameN[go](雨のよう)), 「動詞+ゴ」([na?]go(泣くよう), ku[go](食うよう), na[ko]go(泣きたい), kuo[go](食いたい))が一つの「アクセント単位」を作り、ここでA型、B型が終了している。そして次に「チャッ」が別の「アクセント単位」を立ち上げている。「ゴチャッ」は文法書や辞書では1つの語として掲載されているが⁵、アクセント的には〔非独立の「ゴ」〕と〔独立の「チャッ」〕に区切られる。「チャッ」がアクセント的に独立するのは、この語の由来となった「ごとある」あるいは「ごとくある」の「ある」のB型を引き継いでいるためだと思われる。ちなみに、「ゴッ」だけでも「様態」の意味で次のように使われる。このときの「ゴッ」のアクセントも非独立である。

- (5) オク[レン]ゴッ ハシーカ[タ] ジャッタ (遅れないように走ることだった)
 (6) アカ[チャン]ガ ホ[ゴッ] ナッ[タ] (赤ちゃんが這うようになった)

ここまで見てきたように、アクセント的に独立する「ジャ」「ゴワス」「オッ」「チョッ」「ゴチャッ」は、いずれも存在動詞「ある」「おる」に由来している。これらの語は文法化が進み機能語に変化しているとしても、アクセント的にはもとのアクセントを引き継いでいる。アクセントのこのような性質からこれらの語の性格をもう一度見直すことが必要であるように思う。

⁵ 上村(1989)の「推定」の項に『らしい』『ようだ』に相当する言い方は薩隅ひろくゴトアル[いろいろ訛がある]で一貫する, 「様態」の項に「種子島ではこのように様態を表わす場合はソウを用いようとせずゴトアルを使い, 嬉シカロウゴトアル顔(嬉しそう顔)と言わなければならない, 「希望」の項に「希望を表わすには比況の～ゴトアルを意志形につけて, 行コウゴトアッ(行きたい), 茶オノモウゴトアイと言う」とある。また, 橋口(2004)『鹿児島方言大辞典(上)』に「ゴタル 用言について推量の意を表す」とある。

最後に、終助詞の例を見てみよう。表7に「ド（情報伝達）」の例を挙げる。

表7 鹿児島市方言の終助詞「ド」

	A型 [a]me (飴)	B型 a[me (雨)
名詞+COP	[a]me zya? do~[a]me zya? [do	a[me] zya? do~a[me] zya? [do
過去	[a]me zya?-ta do~[a]me zya?-ta [do	a[me] zya?-ta do~a[me] zya?-ta [do
	A型 [ki?] (着る)	B型 [ku?] (来る)
動詞	[ki?] do~[ki?] [do	[ku?] do~[ku?] [do
否定	[ki]r-aN do~[ki]r-aN [do	[ko-N] do~[ko-N] [do
過去	[ki]-ta do~[ki]-ta [do	ki-[ta] do~ki-[ta] [do
	A型 [a]ke (赤い)	B型 a[e (青い)
形容詞	[a]ke do~ [a]ke [do	a[e] do~ a[e] [do
過去	a?-[ka?]ta do~ a?-[ka?]ta [do	ao-ka?[ta] do~ ao-ka?[ta] [do

これまでと同じく、前接する「名詞+コピュラ」、動詞(活用形)、形容詞(活用形)のHが移動せず、そこで「アクセント単位」が区切れている。したがって、「ド」は独立した「アクセント単位」を立ち上げていると考えられる。ただし、「ド」の後ろには基本的に他の語が接続しないので、「ド」のアクセントがA型かB型かを判断することができない。そのため、木部(2000)では「ド」などの終助詞に対して「X型」という名称を使っている。また、終助詞の「ド」には、文末のイントネーションが被さるので、表7に示したように高く始まることもあれば低く始まることもある。このことも「ド」のアクセント型の判断を難しくしている。他の終助詞のアクセントも、以上の「ド」のアクセントと同じである。

終助詞が独立タイプとなるのは、「終助詞が、前接する語だけを受けるのではない」ということをアクセントで示しているからだと考えられる。文法的には、終助詞は直前の語と一緒にあって「文節」を作るとされる。例えば、(7)では形容詞「いい」と終助詞「ね」が1つの「文節」を作っている。

- (7) kyoo=wa teNki=ga i-i=ne.
 今日=TOP 天気=NOM い-NPST=SFP
 「今日は天気がいいね」

しかし、「ね」が「いい」だけを受けるのではないことは明確で、「今日は天気がいい」という叙述内容を、伝達のムードをあらわす「ね」が包み込む形で発話が成立している。

- (8) 今日は 天気が いい ね

鹿児島市方言の終助詞のアクセントは、このような文法的な性格を示しているわけである。

- (9) kyu=[wa <A>teN[ki]=ga yo-[ka <X>[ne]e. (<>はアクセント型をあらわす)
今日=TOP 天気=NOM い-NPST SFP
「今日は天気がいいね」

謝辞

本発表は、JSPS 科研費基盤研究(A)21H04351 の助成を受けて行った研究の一部を報告するものである。

文献

- 有坂秀世 (1941) 「アクセント型の本質について」『言語研究』7・8, 83-92.
五十嵐陽介 (2021) 「日本語諸方言のイントネーションと言語類型」窪菌晴夫・野田尚史・プラシャント パルデシ・松本曜 [編]『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』22-48, 開拓社.
上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会(編)『現代方言学の課題2 記述的研究篇』明治書院, 167-209.
上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1), 44-62.
大西拓一郎 (1999) 「新しい方言と古い方言の全国分布 ナンダ・ナカッタなど打消過去の表現をめぐって」『日本語学』18(13), 97-110.
春日政治 (1933) 「「小學方言講義」より」『文学研究』4, 1-28.
上村孝二 (1989) 「薩隅方言の表現文法覚書」『九州方言・南島方言の研究』124-145, 秋山書店. (初出は「鹿児島県下の表現語法覚書」鹿児島大学紀要『文科報告』4, 1954 年)
川上葵 (1957) 「準アクセントについて」『国語研究』7, 44-60.
木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.
久保蘭愛 (2016) 「鹿児島方言における過去否定形式の歴史」『日本語の研究』12(4), 18-34.
橋口 満 (2004) 『鹿児島方言大辞典 上・下』高城書房.